

# お茶うけ 第48話

## 木を植えて魚を殖やす

『木を植えて魚を殖やす』柳沼武彦著(『(社)家の光協会刊 1993年8月1日』)の書名を見て、つい「木に縁って魚を求む(望んでも無理なことの譬え)」の諺を連想し、何かユーモアを感じて読み出しましたが、海の自然を取り戻そうという真面目な内容に、襟を正して最後まで一気に読んでしまいました。この本は、急激に荒廃しつつある北海道の漁場環境を生き返らせるため、漁業組合の婦人部の人達が「森と川と海は一つ」をモットーに、6年間で20万本もの木を川の上流に植えてきた地道な活動を紹介したものです。



北海道大規模開発の一環として、例えば、1955年(昭和30年)に根釧原野開発事業が発足して、大規模開墾による経営規模の大きな酪農地帯の形成が始まり、以後開発が進んで、1972年(昭和47年)には、新しい夢の酪農郷を根釧原野に開くという、1000億円の巨大プロジェクトが発足していました。

ところが、1973年(昭和48年)に、根室の根釧地方のサケマス漁場で4年前に放流したサケの稚魚が、親サケとなって戻って来ないという事態が起こりました。北海道指導漁業協同組合の職員の柳沼武彦や漁協の人達は、サケが戻らないのは、酪農の大型化と、河川の改修工事によって、川の流れや水質が変わったためであると考え、本来「森と川と海は一つ」である筈のものなので、サケを呼び戻すには、川を、その先の森を再生しなければならないと感じて行動を起こします。

北海学園大学で農業経済を学び、北海道大学農学部の研究補佐員を経て漁協に入った柳沼武彦は、江戸末期の蝦夷地の探検家松浦武四郎の資料や、多くの研究者の資料から、サケ、コンブ、帆立貝、カキなどの繁殖には、森と川と海の自然が深く関わっていることを学びます。それらは、森の湧水(ゆうすい)の水温とサケの産卵、森林腐植層と海に流れ込む鉄イオン、森林で川に落ちる虫たちと稚魚の餌、川の緩やかな流れと稚魚が覚える匂い、光合成による炭水化物と植物プランクトンから動物プランクトンへの食物連鎖、などなどです。また、森林が失われ川が直線的に改修されると雨水は川を一気に下って、砂や泥を大量に海に押し流して漁場を汚します。なかでも川から流出した微細泥土は、大陸棚を広く埋め尽くして漁場に甚大な被害を与えることを知ります。

特に、サケについては、稚魚のときに流れ下った森と川の状態が、4年目に親サケとなって戻ったときにも、同じでなければならぬことに気づき、目を森に向けたのです。

1988年(昭和63年)に、北海道漁協婦人部連絡協議会の創立100周年記念事業として、「お魚を殖やす植樹運動」が、“100年かけて100年前の自然の浜を”をキャッチフレーズに始まりました。「木を植えて魚を殖やす」の本は、運動発足後の1988～1993年の間の、北海道各地の漁協婦人部の活動ぶりと、117の婦人部が植えた、20万895本の植樹実績表を記載しています。

柳沼武彦は、「大自然を相手に仕事をしている点では、酪農も漁業も同じであるが、酪農は川上に位置し、漁業は川下で仕事をしている」ことをふまえて、「農業も産業である。農業も産業であるからには廃棄物を処理してから海に出してほしい。そのための予算を組むべきである」と書いています。

ここで私は有吉佐和子の「複合汚染」を思い出しました。奇しくも、有吉佐和子が朝日新聞に「複合汚染」の連載を始めたのは、1974年(昭和49年)10月14日からで、根釧地方の漁場にサケが戻らなかったつぎの年のことでした。有吉佐和子は、化学肥料、農薬、合成洗剤など化学工業製品を大量に使うことによって、汚染が増幅されることを知って警鐘を鳴らしたのです。

産業間の繋がりが密接になっている現在、地球の環境を守るために、全ての産業は廃棄物を処理してから外部に出すべきであると痛切に感じました。

以上

### 参考文献:

『木を植えて魚を殖やす』柳沼武彦著  
(『(社)家の光協会刊 1993年8月1日第1刷』)